

## 「ASK?映像祭2021」総評

西村智弘（映像評論家）

「ASK?映像祭2021」は、コロナの影響によって、昨年と同様に無料のループ上映で、授賞式は中止となった。まさかループ上映が二年続くとは考えていなかった。最近のニュースでは、東京のコロナの感染者が5000人を超え、最多記録を更新している。来年こそは、通常の上映ができるようになってほしい。

「ASK?映像祭」はささやかなコンペティションで、もともと応募数が多くなく、去年は最低の応募数だった。コロナが続いていたので、わたしは今年も応募数が少ないと思っていた。しかし蓋を開けてみたら、去年の倍近くの応募があった。理由はわからないが、応募数が増えたことは単純に喜ばしい。応募数が増えると、必然的に作品のレベルも上がるからである。

大賞に選ばれたのは、副島しのぶの『Blink in the Desert』である。緻密につくられた人形アニメーションで、作品の内容とともに完成度の高い作品である。主人公の複雑な心情を無表情の人形で表現しているところが巧みだった。

久里洋二賞は、工藤雅の『差異と反復とコーヒー』が選ばれた。喫茶店のひとときを360度のパンが繰り返すなかで描いた作品である。実をいうとわたしは、この作品を大賞に推していた。作品のもつアナログ感や実験性がわたしの好みだったのだ。

西村智弘賞には、松岡美乃梨の『Destiny』を選んだ。コメディータッチのラブストーリーを、小物や食べ物など身近なものをコマ撮りすることで表現している。大学にあまり登校できなかったため自宅でできる作品になったそうだが、作者の引き出しの多さを感じさせる作品に仕上がっていた。

ASK?賞は、永迫志乃の『Body Obsession』である。「自由をテーマにした抽象アニメーション」と作品解説にあったが、少なくとも抽象アニメーションではないだろう。しかし、「自由」を感じさせる動きの楽しさがあった。

橋本誠史は、3つの応募作品のすべてが入賞した。技術的に決して達者とはいえないが、これだけ破天荒な作品も珍しい。とにかく勢いで強引に押し通すアニメーションである。『おっばいジパング』は、あまりにムチャクチャな展開に感動を覚えたほどだった。歌に乗せた『おなかすいた』、ヒーローもののパロディ『勇者マルダシーノむーちょ』と、作品のタイプが異なっていて、わたしはいずれも楽しませてもらった。稀有な作家である。

岡田詩歌の『Journey to the 母性の目覚め』は、グラフィックでポップな絵柄なのだが、さまざまな技法を用いて、性の問題を多角的に分析していた。テーマ的な広がりをもつ完成度の高いアニメーションである。治田ひかるの『百花のよそおい』は、明治から現代ま

での日本女性のファッション史をたどったアニメーションである。音楽に合わせ、目まぐるしく変わっていくファッションが楽しい作品だった。

森陽平の『The shape of』は、フォトグラメトリを応用し、独自に生成するイメージをつくった実験的作品。3DCGの新しいアプローチである。高谷智子の『復元不能の都市』は、都市が崩壊する様子を写真の合成によるコラージュで描いている。モノクロームのストイックな画面がうまくはまっていた。GUANHANの『隅 すみ』は、人間の内面性をさまざまな技法のアニメーションによって視覚化した意欲作で、難しいテーマに挑戦していた。

小島こころの『7歳の夏』は、初監督作品であるという。拙いところはあるのだが、ショートフィルムとしてよくまとまっていた。今後に期待できそうな作家である。Callico & の『focus』は、楽曲も自分たちでつくっているのだろう。センスのよい映像で、ミュージックビデオとしてよくできていると思った。

基本的「ASK?映像祭」の審査は、応募作品を見て◎、○、△などの印をつけ、その結果を照らし合わせることで受賞作、入選作を決めている。わたしが今回の審査で印をつけた作品、つまりなんらかの意味で評価した作品は以上である。